



# 免費小說



鳥越敦司 atushi torigoe

末日

核爆彈 核轟炸

二〇三X年。二百三〇X年。この日も地球の空は青かった。空地球這天是藍色的。が・・・・・・。還有.....

「大変です首相。アメリカの核爆彈が飛んで来ました！」 “這是非常總理。美國的核炸彈來到飛！”

「何だって！それで防げたのだろうな。」 “即使有什麼！我不知道是可以避免被它”。

「はい、何とか太平洋上で爆発しましたが・・・・。」 “是的，但我設法在太平洋爆炸.....”

これは大変な騒ぎとなった。這已成為一個非常混亂。

アメリカは本年度からロボットを使って軍の指揮にあたらせていたのだ。美國我不得不使用機器人從本財年打了軍隊的命令。

右の事件につきアメリカは、もちろん公式に謝罪した。每個事件右側美國，當然是正式道歉。だが次の日、中国とパキスタンが核兵器を飛ばし合った。但第二天，中國和巴基斯坦擁有彼此跳過核武器。

先制したのは中国だったのだ。這是中國的先下手為強了。これについて世界中から非難があがったが、中国軍首脳は、這來自世界各地的譴責上升了，但中國軍方領導人，

「われわれは軍の指揮を優秀なアメリカのロボットに任せている。文句があるならアメリカへ言ってくれ。」 “我告訴他美國是否存在。抱怨說，軍事指揮官都留給了有才華的美國機器人”。

と声明した。這是一個聲明。

世界中でロボットが活躍するようになって久しい。長時間一直在使機器人活躍在世界各地。

アメリカは、もとよりわが日本でもレストランなどは大抵ロボットだし、今年からプロ野球選手も一人ロボットが現れたのだ。美國，以及它通常是機器人，如餐館在我們這樣的日本，它也是一個職業棒球球員是一個人機器人從今年出現了。

その結果は、・・・・ロボットはオールスターに出場したのだった。其結果是...機器人在全明星競爭了。アメリカの国防省だってロボットが大分いるといわれている。即使是防禦的美國國防部已表示，機器人的出現大分。

もちろん先の戦争は国連問題となったのだが、国連の職員もみんなロボットなのだ。當然，未來的戰爭中它成為聯合國的問題，每個人機器人還聯合國工作人員。

ロボットは給料もいらなし、故障すると他のロボットが修理することになっている。機器人は不需要任何薪水，其他機器人的故障是應該進行修復。開發はアメリカでされたが、車と同様わが国でも近年はロボットの開發は目ざましい。雖然發展已經在美國，近幾年還在車内以及機器人的日本的發展是顯著的。

ある会社では重役をロボットにしたとか、パチンコ屋の従業員は、みなロボットだし、サラ金の取立てもロボットがするそう。也許你和某公司行政機關的機器人，Pachinkoya員工，它的所有機器人的薩拉金也有這樣的機器人集合。

もちろん失業者は増えたが、大部分の人は余暇を楽しめるようになった。當然，失業率有所上升，但大部分的人前來享受休閒時光。それは喜ばしい事だったのだが・・・。它是感到高興的，但是...

そうそう、国連の問題を話さなければならない。哦，是的，它必須以問題的聯合國發言。結局国連では、中国の軍事ロボットのスイッチを切れという事になった。最終，在聯合國，這被認為是關中國的軍用機器人的開關。

しかし。然而。このロボットのスイッチは簡単には切れないのだ。這個機器人的開關是他不那麼容易。

しかもリーダーのロボットを他の多数のロボットが守っている。此外，機器人的領導者具有許多其他機器人防護的。これらのロボットをこわすには相当な国家予算をふいにする事になる。為了打破這些機器人將是吹顯著國家預算。

中国には、それは出来なかった。在中國，它不可能。中国は国連を脱退した。中國已離開聯合國。パキスタンは国家の予算の関係でロボットは軍には置いてなかった。巴基斯坦機器人沒有把軍隊有關國家預算。

この戦争の結果は？這場戰爭的結果呢？世界中が注目した。在世界各地一直專注。結果は中国の圧倒的勝利に終わったのだ。其結果是我在中國的壓倒性勝利而告終。パキスタンは降服した。巴基斯坦投降。それでも、戦争が終わると中国はパキスタンを占領せずに国連へ復帰したけれど。儘管如此，但是當戰爭結束了中國恢復了在聯合國沒有佔領巴基斯坦。

だが、パキスタンの都市は惨澹たるもの。但是，巴基斯坦的城市桑坦德服務。中国もかなりの打撃を受けている。中國也獲得了顯著的打撃。核の雲はあちこちで上がった。核雲分別上漲在這裡和那裡。この事は世界的問題となったが、アメリカの大統領は、但是這件事情已經成為一個全球性的問題，美國總統，「核の雲を無にする爆弾を発明した。」「我發明了炸彈的無雲的核心。」と発表した。會上宣布。

そして、太平洋上で核を爆発、そのすぐ後にその爆弾を爆発させ、言葉通り、核の雲を消したのだ。然後，核在太平洋發生爆炸，不久後引爆炸彈，從字面上看，它是關雲的核心。この新兵器は世界中が買い求めた。這個新的武器購買世界各地。そして、ついに世界的な核戦争が始まったのだ。然後，它終於全球核戰爭的開始。全面的核戦争になって恐れられていたのは核の雲だった。一直害怕成為一個完整的核戰爭は核雲。しかし、これで、その恐れはなくなったのだから。然而，這一點，因為的可能性不再。だが、核の雲を無くす爆弾は輸出されたものは効果のないものばかりだったのだ。但是，炸彈，以消除雲計算的核心，他有這樣的已經遠銷剛剛無效的東西。それで、世界の大都市のほとんどは壊滅した。因此，世界上絕大多數的主要城市被摧毀。ホワイトハウスでは大統領が得意気に話している、在白宮的總統談話自豪，「どうだね、わたしの立てた作戦は？」「你在做什麼，我的正直策略是什麼？」

「上々ですよ。」「這是最好的。」と副大統領が言った。而副總裁說。「これで、あとは日本とスイス位だね。」「現在，這是日本和瑞士的位置了。」大統領は、世界中の映像を見ながら話す。總統，說話一邊看世界各地的視頻。「それも時間の問題ですよ。スイスは、とまかく、日本なんてどうにでもなるんですから。」「這也是遲早的事。瑞士是，在任何情況下，南特因為我做了隨時如果日本。」と国防長官が発言した。國防部長曾表示。「それより、」「從」と副大統領は発言する。和副總統說話。「日本のやつらも、大統領が、まさか宇宙人だなんて思ってもないでしょうねえ。」“日本EM甚至，可能的Une甚至不是沒想過南特的外星人總統”。「ああ、彼らの頭には輸出しかないからなあ。」「哦，因為只有出口到他們的頭上。」と大統領は答えて、笑った。總統回答說，笑了起來。「しかし、わたしを受け入れた君達は賢明だったよ。」「可是，你們這是明智的接受了我。」「そうですとも。われわれは、もう日本には勝てないと思っていたのですから。」「即使我們是，我們是，因為我覺得我不能在日本贏了對方。」

悔しそうに、副大統領は述べた。在懊惱，副總裁說。「まあ、日本が、いくらがんばろうと我々の星の文明には、とても及ばんよ。現に・・・。」「好了，日本是，在我們的文明嘗試更難的，非常Oyoban'yo的明星。其實.....」と、話して大統領はニヤリと笑った。而且，總統說著笑了起來笑著。「あの中国の軍事ロボットも、ここホワイトハウスで操作していたのだし、核の雲を消す爆弾も我々の星のものさ。」「中國軍隊的機器人，來我一直在這裡工作了白宮，那些炸彈關閉我們的明星的雲的核心。」

「大統領、世界はやはり我々の星のものさ。」「主席，我的世界仍然具有美國的我們。」

「大概、世界はやはり我々アメリカのものじゃない。」 主席，我的世界仍然是住在美国的我们。

と発言してCIA長官が立ち上がった。口語和上升中央情報局局長。

「そうだと。乾杯しよう。」 “我也是如此。試圖敬酒。”

と述べると大統領はグラスを取った。為了描述總統接過酒杯。

「日本に核戦争を仕掛ける日に。」 “當天發動對日本的核戰爭。”

「乾杯！」 “乾杯！”

アメリカ合衆国首脳一同はグラスを合わせた。美國峰會每個人都是玻璃的組合。

無口な日本の首脳 沉默的日本峰會

時の首相は大変な無口で知られた人だった。首相在當時是誰是一個非常沉默寡言已知之一。長い文章は喋れないらしい。長句子似乎不說話。

「首相、大変です。今度は本当の核が・・・。」 “總理非常。現在真正的核心.....”

首相官邸にいた、わたしに、防衛大臣が電話してきた。是在總理辦公室，對我來說，國防部長來電話。

「すぐ避難を！」 “馬上撤離！”

その後の電話の声を聞く前に、わたしは地下の核シェルターへ逃げた。之前你聽到的後續手機的聲音，我跑了到地下室的核庇護。十分後、日本の首脳は皆、核シェルターに集まった。夠後，日本領導人都聚集在核庇護所。

「首相、どうします？」 “總理，你怎麼辦？”

日本の首脳に一同は、異口同音で聞いた。日本每個人的領導聽到一致的。

「そうだな。われわれだけが生き延びればいけないか。とても勝ち目はないよ。」 “是的，我們只有不做

我Ikinobire，這是非常取勝是沒有的。”

と、わたしは答えた。有一次，我回答。

「そんな・・・。」 “那.....”

美國一同が、その時々のわたしは上の席で聞いている。領導每個人都是。言明所以，我並不是在焉聽說過。なぜ

なら、わたしは、アメリカ製のロボットだから・・・。這是因為，因為我是美國製造的機器人....

## 免費小説

<http://p.booklog.jp/book/106307>

著者：鳥越敦司 atushi torigoe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dontanine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106307>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106307>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ